

Community & Friend

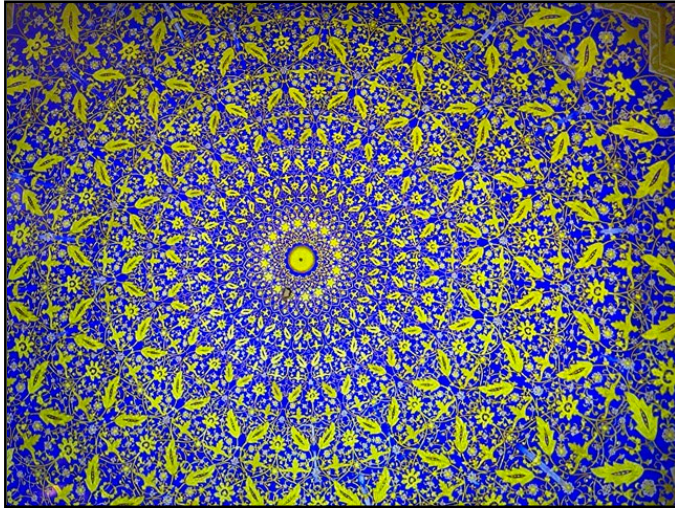


2026 年 8 月号

有限会社アルファ
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

過去の月間通信は <https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm>

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 8 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



行ってみたいところが、またひとつ増えた。サマルカンド
というところらしい。国としてはウズベキスタンという。そも
そも、キルギスの文化に興味を持った。サマルカンドは
その副産物として自分の前に現れた。西洋人から見
れば中東と呼ばれる地域で、その果ての遥かな東に
我が列島が位置する。私の父親は中近東の文化に
傾倒していて、さまざまな展覧会があると、私を伴って
観に行っていた。それは記憶の片隅にあるが、そんな
事の影響ではなく、もっと根本的なところに影響されて
心震わせているような気がする。

小学校 5 年の家庭科の実習で製作した暖簾があ
る。母の裁縫を『私が針を持っている時は、顔を近づ
けてはならない』と何度も注意されるほど、針仕事が
面白く、いつも眺めていた。針に糸を通し、その針が器
用に動いて行くその後に、糸が形を作っていくその様が、
興味の根底にあったと思う。父と母から受け継いだ遺
伝子に、見ればその通り身体を動かせるという才能は、
何もスポーツに限った事だけではなく、針仕事も見てい
ただけで、イザ、家庭科で運針の授業がスタートすると、
女性教師も顔負けに針を動かす事が出来た。

学校で購入する用意された裁縫道具に入っていた
針は、私には長すぎた。だから母の針箱から使いやす
い短めの針を使っていた。おかげで通信簿の家庭科は
5 だった。小学校の通信簿はそれと体育だけが 5 だった。
笑える話したが、暖簾の話に戻すと、縫った暖簾に
絵具で絵を描いて、アイロンで定着させたと思う。其の
生地は画像のような青だった。その色を見て頭に浮か
んだのは、何故か頭の中に流れていた、『月の砂漠』。
聴こうとして聞いていた訳では無いが、こどもながら頭に
しばらく流れていた。歌詞は冒頭の ♪ 月の～砂漠を
～はるばると～ ♪ ここしか知らない。知らないが、自
分には充分だった。心は惹かれて、静かに躍る。踊る
ではない、『躍る』で変換間違ではない。

♪ 月がとっても青いから、遠回りして帰ろう ♪ という
唄もあった。銭湯からの帰り道、月を眺めながら歩いて
いた。目を細めると、月はみっつくくらいに輪郭を増やす。
それも面白かったが、何と言っても、どれだけ歩いても
月を追いつけなくて、近くに見えるのに何故追いつけな
いのだろうと考えていた。幾晩かそれを繰り返して歩い
てみると、不意に月がいなくなった。麻雀は方角と風で
時を表す。東南西北で後に風をつける。東風、南
風……という。風呂屋から家まで帰るには、どうしても
角を右にまわる必要がある。いなくなった月を探すと、
左にいた。追いつけないと思っていた月が、自分と並
んで進んでいた。月を追いつく方法は、自分が右なり
左にまわれば良かった。存外簡単な事だった。

さて、此処からが肝心、本当に月は青いのか。月は
青くはない。だったら、何故月が青いと言われても違和
感なく納得してしまうのか。それは先に書いたように暖
簾の生地が青いからだ。きっと月が青いから遠回りして
でも見ていたいと思うのは、月が照らしている周りの空
気が青く光るからだ。その気持ちに自分も同調してい
る。だから、月に照らされた砂漠は青く見えるのだろう。

青の生地を縫ったのれんの右下に、左に向けて小さくラクダを 2 頭描いた。乗せている人間ではなく、ラクダに結んだ綱を引っ張って歩いている、人間を描いた。その人間は独りで充分。書くのが面倒だった。だから前のラクダと後ろのラクダも綱でつないだ。独りの人間と、2 頭のラクダはゆったりと進んでいる。左前方は、真上に描いた満月に照らされ、茫洋とした青い砂漠。月の輝くような黄色と、青のコントラストは、色彩学では対色なのだろうか。青の T シャツを着て、黄色のパンツを穿く勇氣はないが、砂漠の民が着る白のワンピースのような服を一度は来てみたいと思う。5 月の灼熱の北京、元は砂漠だったという噂に納得したが、晴天の紫禁城はまこと暑かった。持参していた藍染めのスカーフを頭に法華振りして、そのまま首に巻き付けていると、同行していた絵本の福音館の女性元社員は、砂漠の民みたいですねと言っていた。汗かきなので、タイランドでは、大きめのタオルを同じようなスタイルで歩いていた。

空路ではなく、シルクロードの陸路を西から東へ旅してみたい。此度の生では既に難しいと思われるが、来世では実現できるのではないかと楽しみにしておこう。

もっとも、どうしても横断しなきゃいけない中華は厄介のタネだが、果たしてどうしたものか。そういえば、先日丹波で茄子とピーマンを栽培している哈爾濱出身の農家を訪ねた。自己紹介では『クリスチャン』だと言っていた。辺野古で話題となった同志社に留学することだったか、神戸の神学校に留学して、後に同志社大学院に行こうとして中退したのか、記憶から外れてしまっているが、とにかく敬虔なクリスチャンだという事だった。そこで、私の最大の関心事は、中国共産党とキリスト教との同居は如何に果たされるのか。ストレートに聞いて良いのか分からなかったので、出て来た質問は、『共産主義と宗教はどのように相容れられているのですか』だった。応えは覚えていない、と逃げようと思ったが、真面に書くと『政府に認められた教会があります』『だけど、非公式の教会というもあり、これは弾圧の対象となる可能性は否めません』だったと思う。『間もなく、母が来日するので、本場の四川料理を是非味わいに来てください』と言ってくれた。

我が国は核武装する必要があると思う。核は使う事に価値があるのではなく、使わない事に価値がある特殊な武器だ。使われた経験を持つこの列島は、その犠牲がトラウマとなって、核を我が国が持つ事にアレルギーにまで進展している。だけど、痛みを知っている国として、また使われる恐怖より、使われる防御の為に、痛みを活かせば良いのではないかと思う。というのは、それを必要とする時期が来ているように思うから。この 81 年間は鶏群の一鶴でいられたが、それは米国を経済で傭兵として雇い入れていたからに過ぎない。石原莞爾のような人物が又登場する可能性は否定できないが、だからと試してみすみすこの列島をチベットのよう、蹂躪される事を看過は出来ない。

私の見立てでは、その米国経済は、世界の資本主義経済の発展に寄与する力は最早無い。樹木は葉を使い捨てにしないが、資本は米国を使い捨てにする事がなくは無く、その役どころは中華に移行しようと Kissinger は 1971 年訪中し、下交渉を毛沢東と周恩来とした。翌 72 年に Nixon が訪中して米中国交正常化が結ばれるのだが、その間の 1971 年 8 月 15 日、どうも資本はこの 8 月 15 日が好きらしいが、ニクソンショック、つまりドルとゴールドが分離された大きな歴史的事実がある。資本が富む策として、これ以上は無く、その策の舞台は今、中華に移行しようとしている。あれから 50 年ほど掛けて、ようやく打っておいた策が稼働する時が来た。『国家百年の計』は聞いたことがあり、人材育成の尊さを表す言葉だが、こんなに先の先までイメージして生きている連中を相手にしている。石原莞爾のように、なまじ切れるより、もっと茫洋とした中に核心を見出すべきなのではないかと思える。米中二国がパワーバランスを取る事は無理筋に思えるので、米国寄りに構え、中華一色になっては困る国と連携して、第三勢力を経済力も伴って日本文化で形成する、しかないのかも知れない。そういう意味では、序の口という口が開いた 2026 年で、今から 2030 年に向けて、展開していく事になるのだろう。一步間違えば暗闇に沈む。

有限会社アルファー 吉田清一郎